

2007年2月4日 降誕節第6主日礼拝

『全員、無事に』

(ヨナ2章4～11、使徒27章33～44)

今までもそうであったように、パウロのローマへの旅は試練の連続でした。激しい嵐に襲われて、船は沈むばかりです。それでも神様は、希望を与えてくださいました。「元気を出しなさい。船は失うが、あなたがたのうちだれ一人として命を失う者はいないのです」(27章22)。神様は、そう約束されました。この約束は、まもなく実現します。なぜなら、パウロは必ず皇帝の前に出て、イエス・キリストを証ししなければならないから。それが神のご計画だったからです。それだけではありません。パウロと一緒に船に乗っているすべての人を、その命を、神様はパウロの手にゆだねられたのです。そのためパウロは、船に乗る人びとの救いのために行動します。まだ神様を知らず、信仰すら持たない人々、見ず知らずの人々のために、パウロは命をかけて働くのです。

まず27～32節をみてください。「この船は粉々になるが、乗っている人は、皆、必ず助かる」。そう神様が約束してくださいました。このことをパウロは、皆にきちんと伝えました。にもかかわらず船乗りたちは、小舟に乗って船から逃げ出そうとします。これに気づいたパウロは、言いました。「あの人たちが船にとどまっていなければ、(この船も)あなたがたも助からない」(31節)。すると兵士たちは、パウロの言葉に従って、船乗りたちが逃げられないよう、小舟の綱を断ち切って海に流します。こうしてパウロは、同じ船に乗っている人びとの命を救いました。それだけではありません。あの船乗りたちの命をも救ったのです。激しい嵐の中、小舟で出て行けば、船乗りたちも助かりません。何日間も嵐にもまれ、飲まず食わずでいるうちに、冷静な判断もできなくなったためでしょうか。自分たちさえ助かれば、ほかの人はどうなっても構わない。そう思って行動する、身勝手な人たちです。しかし、その人たちも、みんなが助かるためには必要です。こうしてパウロは、神様にゆだねられた務めを忠実に果しました。船にいる人達が残らず救われるように。たとえ、相手がどんな人であっても、神様から託された人々の救いのために、忠実に仕えていったのです。

このパウロの姿を見てか、百人隊長や兵士たちの態度も、前とはずいぶん変わってきました。「あの人たちがいなければ、船もあなたがたも助からない」。そう命令したのはパウロです。百人隊長は、ひと言も言っていません。しかし兵士たちは、まるで隊長、いえ王様の命令を聞いたかのように、即座に行動します。パウロが命じたとおり、動いたのです。

同じ事は、33～38節でも繰り返されます。嵐に遭ってもう二週間になるのに、皆、誰も何も口にしていなかった。そんなことでは、これからもう一波乱あるのに、生き延びることなどできない。そう思ったパウロは、皆に勧めます。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食わずに、過してきました。だから、どうぞ何か食べてください。

生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません」(33～34 節)。そう言ってパウロは、皆のみにている前でパンを取り、感謝の祈りを神様にささげました。そしてパンを裂いて食べ始めました。このパウロの姿を見て、一同は勇気づけられたのです。36 節「そこで、一同も元気づいて食事をした」。大変な状況で、死の危険と背中合わせのときに、心から神様に感謝をささげているパウロ。祈る姿。神様から与えられた命のパンを、感謝して食べるパウロの姿。船は今も、激しい嵐の渦中にあるのです。それでも、「あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません」と。かつて主イエスがお語りくださったみ言葉を思い起こし、それを口に出し、身も心もすべてを神にゆだねきっているパウロの姿。このパウロの姿を見て、人びとは本当に安心したのです。平安を取り戻せたのです。嵐の真っ只中で！ わたしたちクリスチャンの存在意義は、このように尊いのです。

パウロのほか、神様を信じている人はこの船の中におりません。たくさんの罪に問われた囚人たちが何人もおり。それを見張り、ローマまで連れて行く兵たちが、それ以上にたくさん乗っており。さらに船主や船荷を管理する人々。そして船を操る乗組員たち。あわせて276人の人がこの船には乗っています。しかしその中で、イエス・キリストを知っていた、信じていたのは、おそらくパウロ一人です。ほかの人はみな嵐を恐れ、もはや助かる見込みはないと、絶望するのみです。食事がのどを通らないのも無理はありません。しかしその中にたった一人、クリスチャンがいた。どんなに絶望的でも、最後まであきらめずに、神様に心を向けていた。見ず知らずの者のために、一生懸命働き。それも人を殺したり物を盗んだり、とんでもない罪を犯してきた自分たちのために、ここまでしてくれるとは。あるいは、みんなを見捨てて自分たちだけ助かろうとした船乗りたち。そんなわたしのために、神に祈り、きっと助かるから、神様がわたしたちにはついていてくれるから、と希望を与えてくれる人がいた。この人がいう。「さあ、わたしと一緒にご飯を食べましょう」。このパウロの姿、そして言葉に、どれほど皆が励まされたことでしょうか。

わたしたちも、そのようなクリスチャンでありたいと願います。この世界は、本当に滅びに瀕しています。戦争のうわさは絶えず。悲しい事件があとを経たちません。家庭も教育現場も崩壊寸前です。自然環境もむしばまれ、地球温暖化など、本当に心配なことばかりです。まさに沈没寸前の船に、わたしたちは乗り合わせているのかもしれない。嵐は現実のものとなっています。しかしその中でも、本当にわたしたちが主をあがめていくなら、主に感謝して、命のパンを食べーみ言葉と聖餐に養われていくなら、世の人々は慰められるのです。どんなときにも主の約束に生き、主に養われているわれわれ教会の生きた姿が、人々を慰め、助け、救いへと導くのです。

その証拠に、39～44 節のくだりをご覧ください。いよいよ嵐は激しくなり、陸地に近づいた船は、浅瀬に乗り上げてしまいます。激しい風と嵐が、この大きな船を、容赦なく岸边にたたきつけたのです。そのため、とうとう船は木っ端みじんに壊れます。船首は浅瀬にめり込んで動かなくなり、船尾は波の力で壊れました。座礁したのです。ここで兵士

たちは、囚人たちが逃げないように、殺してしまおうと計りました。それを止めたのが、百人隊長でした。これまでパウロの言うことには全く耳を貸さなかったあの人。パウロよりも船主や船長の言うことを聞いてきたあの人が、今は、パウロの意を汲んで行動しています。

当時、囚人たちを守る兵士の務めというのがありました。牢屋でも護送船でも、もし囚人を逃がしたら、その罪は逃がした者が負わなければなりません。もし死刑囚を逃がしたら、逃がした兵士が責任をとって、囚人の代わりに死刑にならねばならなかったのです。ですから船が座礁したとき、兵士たちがあのように考えたのも無理ありませんでした。「囚人が逃げたら自分が罰せられる。それなら、いっそ殺してしまおう」。そのようにしても、兵士たちはとがめられるどころか、立派に務めを果たしたと言われたのです。

ところが、兵士たちが手を下そうとした途端、百人隊長がそれを止めました。本当なら、この人が、囚人抹殺の指令を出していてもおかしくないくらいです。でもこの人は、兵士たちを止めました。止めろと命令しました。なぜなら、「パウロを助けたかったから」。ここに、神様の生ける働きを見ることができます。パウロがローマに行って、皇帝の前でイエス・キリストを証しすること。これこそが神の御意志であり、パウロが召された目的でした。神様が一度決断されたことは、必ず成し遂げられます。どんな嵐も、人間の企みも、神様を妨げることはできません。

と同時に、こうも思われるのです。あの百人隊長は、最初のころこそ、パウロを軽んじ、神を神とも思っていませんでした。ところが同じ船に乗って嵐にあい、パウロの言うこと、することを見聞きしているうちに、まるでパウロのように考え、行動する人に変えられてしまったのではないかと。パウロというクリスチャンが、たった一人乗っていた。その一人の存在が、船に乗りあわせた人びとに、それほどの印象と影響を与えたのです。それは、聞く耳をもたない人々に対しても、誠心誠意、パウロが神のみ言葉を伝え続けたから。嵐の中で希望を失い、死んでも同然となっていた人々を「助けたい、救いたい」。ただその一心でパウロは語り、行動したからだと思います。その姿にふれていくうちに、百人隊長も、知らず知らずの内にパウロのように考え行動するようになってしまったのではないのでしょうか。自分の部下たちが、囚人たちを手にかけてしようとしたそのとき、黙って見逃してよいのだろうか？ パウロならどうするだろうか？ パウロが信じている神様は、わたしに今、何をせよと言われるだろうか？ 百人隊長は神様に聞き、神様がそれに応えられたのかもかもしれません。

最初、誰も耳を傾けてくれなかったパウロ、しかし何とか人々を救いたい。そのパウロの思いこそ、神様から与えられたものに違いありません。「あなた（パウロ）と一緒に航海しているすべての者を、あなた（パウロ）に任せ」た（24節）。神様はそう言われたのですから。神様より託された務めに忠実に、みんなの救いのために。この思いと言葉は、やがて船に乗る人すべての心をつかまえていきます。神様の約束どおり、確かに船自体は失われました。しかし、だれ一人命を落とす者はいませんでした。それどころか、44節をみると、

百人隊長の命じるまま、泳げる者がまず海に飛び込んで陸に上がり、泳げない人は板きれや船の乗組員につかまって、泳いでいったとあります。

少し前までは、自分たちの救いばかりを求め、皆を見捨てて逃げようとした乗組員たち。その人たちが、今ではみんなを思いやり、弱い人びとを背負って泳ぎ始めました。さらに囚人など殺してしまえと思った兵士たちも、百人隊長の言葉に後押しされて、囚人たちを背負い、助けました。皆が皆、まるでパウロのように行動し始めました。力のある者は弱い者を背負い、力ない者は遠慮せず力ある者たちの好意を受ける。船にのっていた全員が、互いに相手をおもいやり、心一つにされていったのです。そうして、船に乗っていた276人全員が無事に、救われました。皆が無事に、陸地に上がることができたのです。すべてはパウロが告げたとおり、神様のお約束どおりになりました。このように人を造りかえる御業。み言葉と祈りによって、堅く信仰に立つとき、わたしたち自身はもちろん、周りにいる人びとも同様に新しくされていく。これこそが、神のなさる御業です。

わたしたちも、神の約束を堅く信じ、人びとに神の恵みを語り、パウロのごとく、世を照らす光として歩んでいきたいと思えます。

[説教者：堀地正弘牧師]